

2021 年の中国の新年: 丑(うし)年

中国の十二支(「生肖」すなわち「似たものに生まれる」の意)は、繰り返される 12 年のサイクルで構成されます。それぞれの年が一つの動物で象徴され、その動物の性質はその年に生まれた人の性質を表していると言われています。

2021 年の中国の新年は 2021 年 2 月 12 日に祝われ、中国の十二支の 2 番目の年、丑年です。

その強さと農業を支える役割を評価される雄牛のように、丑年に生まれた人は、信頼され、知的で、働き者で、穏やかであると言われています。きちょうめんで勤勉、本質的に我慢強い人々です。

「雄牛マンラージと言葉の力」は、『ジャータカ』の物語の中にあり、ブッダの数々の過去世についての 550 の物語、寓話(ぐうわ)、逸話の一つからの再話です。

雄牛マンラージと言葉の力

リン・コーベルによる再話

昔、南アジアの緑に囲まれた小さな村に、イランという名の勤勉な農夫が住んでいました。妻と 2 人の子と共に、彼は数エーカー(訳注: 約 10 反)の大麦畑、小さな野菜畑、実の豊かな甘さで評判の貴重なナツメの木立の面倒を見ていました。1、2頭の雄牛、少しばかりの鶏とヤギの

助けと共に、その家族は十分な暮らしをしていました。豊作の時には、イランは収穫から幾らかの銀貨を蓄えることさえできたのです。

一日の仕事が終わった、ある春の夕方、イランは休憩を取りながら次の季節の計画についてあれこれ考えていました。戸口をたたく音に驚き、彼は考えから引き出されました。誰がこんな時間にたたいているのだろうか？ 近所の人に助けが必要なのだろうか？

ドアを開けると、イランは古い友人バシャーラがほほ笑んでいるのを見ました。「バシャーラ！ どうしたんだい？ お入り、お入り」。イランは戸口を大きく開けましたが、バシャーラは少し後ずさりして脇を見下ろしました。そこには淡黄褐色の子牛が彼の脚に体を押し付けるように立っていました。

「バシャーラ——それは誰の子牛かい？」と、イランは尋ねました。

「イラン、友よ」と、バシャーラは言いました。「何年も前に私が病気で働けなかった時、君は自分の食卓から私の家族に食べ物を分け与えてくれ、助けてくれた。決して忘れたことはないよ。たまたまこの春、僕たちの群れからいつもよりたくさんの子牛が生まれたんだ。この小さいのは、数カ月前の夜明けに生まれて、額に珍しい模様がある。まるで朝日のようだよ」

イランはひざまずいてその模様を見ました。黄褐色の肌に触れようと手を伸ばした時、子牛の穏やかな目と視線が合いました。雄牛の眉間のより明るい色の毛が、確かに日輪の形をしていました。イランはほほ笑みながら子牛の背中をなでました。子牛がイランの視線を受け止めている間、バシャーラは話し続けました。「友よ、僕たちは感謝を表す方法を見つけたいと思ってきた。もしこの若い牛を贈り物として受け取ってくれるなら、僕たちは嬉しいのだが」

イランが子牛をなで続けていると、その穏やかな動物は近くに来て、鼻をイランの顎の下に突っ込みました。イランはほほ笑みました。温かさが胸に広がったのです。

イランは見上げて友人にほほ笑みました。「ありがとう、バシャー。ちょうどよかったよ。僕たちの 1 頭の雄牛は年を取ってきて、もうあまり土地を耕せなくなるだろう。君が戸口をたたいた時、僕はちょうどそのことを考えていたんだ。君の贈り物は祝福として届いたんだよ」

すぐその場で、イランは子牛をマンラージと名付けました。それは「心を支配する者」という意味です。

バシャーもイランも、この幸先の良い模様を持つ子牛が、悟りを開いたボーディサットワ(菩薩)で、すべての人に益して働くために牛として生まれたのだとは知りもせず、想像すらしませんでした。

イランはマンラージの世話に専心し、子牛に最高の食べ物を与え、マンラージを悪天候から守れるように、荒廃していた古い差し掛け小屋を建て直しました。

徐々に優しく、農夫は牛にくびきを付け、そして少しずつ荷を増やして訓練していきました。切り株や大石は、マンラージの増強する力にかなわないことを示しました。その雄牛は命令を素早く学び、ためらうことなく応えました。彼が耕した畝は真っすぐに厳密でした——イランからの指示がほとんどなくても。

マンラージは農場にとって重要な補強になりました。どんな天候や仕事にも、常に安定していました。年月がたつにつれ、穀物はよく育ち、イランの銀貨の貯蓄は増えていきました。

しかしその後、時の流れと共に、イランの運が変わりました。干ばつが襲い、3年連続で不作となりました。イランの貯蓄は次第に減少し、ほとんどなくなりました。そして彼は家族を養うために必死で悪戦苦闘しました。ナツメの果樹園が市場向けに実り続けているのはありがたい、と彼は思いました。

この困難な時期の間に、イランがくびきを付ける時に短気だったり、時には家族にいら立って話していることに、マンラージは気づきました。

ある夜、マンラージは眠りに落ちながら、どうしたら農夫を助けられるだろうかと考えました。

翌朝、イランが差し掛け小屋に入り、マンラージの頭をなでた時、雄牛は農夫を見詰めて、優しく言いました。「おはようございます、農夫のイラン」

イランはびっくりしました！「マンラージ！ おまえはしゃべれるのか！」

マンラージは大きな頭でゆっくりとうなずきました。「はい、そしてあなたに話したいことがあります」

イランはマンラージを見て、魔法に掛けられたように、驚きで目を見開きました。彼は身を乗り出して耳を傾けました。

「あなたは私にこのような良い暮らしをさせてくださり、とてもよく面倒を見てくださいました。太陽が私の背中を熱した時、あなたは気づいて小川に連れて行ってくださいました。特に長く働いた日には余分に干し草をくださいますし、冬で飼料が不足した時は私の好物の穀物をくださいます。私が牛だというのに親切にしてくださいます」

「干ばつが大変なことは分かっています。それで私は、あなたとあなたの家族を助けたいのです。ある計画を思い付きました」

あっけにとられて、イランは起きていることと聞いていることを理解しようと努力していました。

「どんな計画だい？」と、イランは尋ね、注意深く耳を傾けました。

マンラージは続けました。「今日の午後、村へ行ってムファドを見つけてください。金持ちの商人です。彼は私の力に賭けをすることに興味を持つかもしれません。もしそうなったら、私が彼の大麦畑を横切って3トンの荷を引けることに賭けてください。あなたは宝物であるナツメ畑の権利を賭け、彼は銀貨 500 枚を賭けるのです」

それを聞くと、イランはびっくりして身を引きました。「おまえはとても強い、マンラージ。でも私のためにそんな過酷な務めをさせるわけにはいかないし、私のナツメ畑も危険にさせない。私にはそれしかないのだ。もし私が負けたら——私はすべてを失う。そして私の家族の暮らしは今以上に悪くなる」

「農夫イラン、私はできます」と、マンラージは静かな確信を持って言いました。イランはマンラージの目を探るようにのぞき込みました。マンラージの額の日輪の形が突然生き生きしたように見え、その光線がイランに力と確信を放ちました。

自分でも驚いたことに、気がつくやうにイランは賛成してうなずき、マンラージの計画に同意していました。

新しい確信の感覚と共に、イランは素早く朝の仕事を終え、街へと急ぎました。到着すると、彼は商人ムファドを探し出しました。

「旦那」と、イランは始めました。「もし私が賭けを提案したら、あなたは興味を持つかもしれないと思いますよ」

ムファドはイランの方を向き、イランを頭から足の先まで見て、この農夫は何をを考えているのかと思いました。

「どんな提案だ？」と、商人は尋ねました。

「私は3トンの荷を引けるくらい強い雄牛を持っています。この牛があなたの大麦畑を横切ってその荷を引けるかが賭けです。あなたは 500 枚の銀貨を賭けてください。私は私のナツメの果樹園の権利を賭けます」

ムファドは頭をのけ反らせて笑いました。「それは不可能だ！ 雄牛が——どんなに強くても——そんな荷を引けるわけがない！ しかしおまえのナツメが私の収穫に加わるのは良いことだ。あんたの賭けに乗ろう」

彼らは3日後に畑で会うことに同意しました。

時を移さず、ムファドは街中に通知を掲示し、村人たちに彼らの土地に散らばっている大きな石や岩を集めて、彼の畑に運んで来るよう呼び掛けました。そこでは、商人の助手が荷の重量を測るための計量石を使いました。2日間で、山になった土、切り株、岩、砂利などが厚板の上に載せられ、マンラージのためにくびきに取り付けられました。

3日目の夜が明け、イランとマンラージが畑に到着した時、イランは巨大な荷と集まった群衆を見て、大きく息をのみました。マンラージはイランの注意を引いて確信を与えようと、一息吐き出しました。しかし、イランの目は下を向き、不安と疑念に包まれていました。

「さて、ごきげんよう、農夫よ！」と、ムファドがあざけりながら、イランの前で 500 枚の銀貨の入った袋をジャラジャラ鳴らしました。大げさなしぐさで、彼は銀貨を賭けの台の上に置きました。彼は悠々とその隣に、イランのナツメの木々の譲渡のために作成した同意書を置きました。

「それで、これがあんたの雄牛かね？」

「そうです」と、イランは署名として羊皮紙に彼の母印を恐る恐る押しながら答えました。

マインドをますます心配でいっぱいにして、イランはくびきをマンラージに掛けるために荷車に向かいました。

いよいよ、マンラージが引く瞬間がやってきました。恐ろしさに圧倒されて、イランはせっかちに荒々しく命令を放ちました。「引け！ 今だ！」そしてより一層大きく荒っぽい声で、「引っ張れ！」

じっと前を見詰め、マンラージは一つの筋肉も動かしませんでした。まるで、彼の4本の脚は地球の中心に根を張っている木のようなようでした。

イランはさらに動揺してしつこくなりました。「どうして動かないのだ？ おまえは役立たずの雄牛になってしまったのか？」マンラージは反応せず、動かないままでした。

数分が過ぎると、群衆は皆であざけり、冷やかし始めました——雄牛とイランの両方を。

素早く、商人はももをたたいて言い放ちました。「こんなことは不可能だと分かっていたのだ！ 何てあんたはばかげているんだ」。彼は農夫の背中をたたきました。そして、イランの貴重なナツメの果樹園の同意書と一緒に、500 枚の銀貨を懐に入れました。一瞬にして、イランは家族の最後の頼みも失ってしまいました。

イランは意気消沈してマンラージをくびきから外し、二人はのろのろと農場への帰途に就きました。村人たちに聞こえない所まで来ると、イランはマンラージに向き合い、困惑し、落胆して尋ねました。「何があったんだ？ おまえはできると私にはっきり言ったじゃないか！ もはや私には家族を食べさせてやるすべも無くなってしまった！」

マンラージは道の真ん中で立ち止まると、静かに言いました。「私は引く準備ができていましたが、あなたは心配から、声を張り上げてあのような荒々しい言葉を言ったのです。私の心はそのような不親切に応えることはできませんでした。荒々しい言葉は最も優しい心でさえも石に変えることがあります。もはや私には、あの荷をちょっとでも動かす勇氣はありませんでした」

イランとマンラージの視線が合いました。「ああ、マンラージ、申し訳なかった。私は恐ろしさに打ちひしがれて、乱暴なことを言ってしまった。許してほしい。おまえは私と私の家族に自分のすべてをささげていたのに」。農夫の誠実な心は、後悔で打ちのめされました。

「心配しないでください」と、マンラージは言いました。「私にはもう一つ、案があります」。二人は歩き続け、そしてマンラージは翌日展開するであろう新しい案を話しました。

翌日太陽が昇ると、農夫とマンラージは街に戻り、店の戸を開けているムファドを見つけました。

「どうしたんだい、農夫よ、驚きだ！ 借金するために戻って来たのか？」

「とんでもありません、ムファド、それどころか私は再試合を申し込みます。今日です。でも今回は、荷を動かすのに 2000 枚の銀貨です。もしあなたが勝ったら、私の農場全部の権利書を渡します。私が賭けに勝ったら、あなたは銀貨を私に渡し、ナツメ畑の権利を私に返すのです」

商人は信じられないというように笑いました。「あんたは私が考えていたよりもっとばかだな！あんたの雄牛にくびきをつないで、じゃあ始めよう！」

イランがくびきを引っ張っている間、商人は陽光できらめく 2000 枚の銀貨を並べました。再試合が進行中という知らせが素早く村中に広まり、人々が集まり始めました。

「さあ農夫よ、始めるんだ！」と、ムファドは大きく手を振りながら宣言しました。「我々は皆、第2幕を見るのを待っている！」イランの親友であるバシャーは群衆の中にいて、友人に一体何が起こったのかといぶかりながら、そわそわと行ったり来たりしていました。彼は理性を失ってしまったのだろうか？

静かにマンラージの脇腹に身を乗り出してその耳にささやきながら、イランの表情は毅然(きぜん)としていました。「おまえは強い、勇敢で断固とした意志を持っている、マンラージ、そしておまえはこれよりももっとたくさんの重さを引く能力がある！ おまえにはできる！ おまえは雄牛の中で最も偉大だ！ じっくり行け。準備ができたなら引くんだ」

マンラージは頭を下げ、両肩をくびきに入れ、それから力強く前足を蹴り出しました。彼が1歩、そして次の1歩と踏み出すと、マンラージの臀部(でんぶ)のつやつやと輝くすべての筋肉が奮闘で隆起しました。そして荷はじわじわと畑を横切って動き始めました。集まっていた群衆は驚きで息をのみました。イランはマンラージの脇に付き添い、偉大な雄牛が着実に3トンの荷を引く推進力を得ている間、激励し続けました。村人たちは自分の目を信じられませんでした。

マンラージが畑の端に達すると、群衆はわあわあと歓声を上げました。バシャーラは彼の帽子を空中に放り上げ、勝利に手をたたきました。

ムファドは信じられないというように頭を振り、袋の中に銀貨を集め、イランに渡しました。「あなたは公明正大に勝った」と、彼は不本意ながらも敬意を払って認め、イランにナツメ畑の権利書を手渡しました。

マンラージとイランは、銀貨の入った袋をマンラージの首に巻き付けて家路に向かいました。雄牛に近寄ると、イランは雄牛の広い背中に手を置き、「マンラージ、どうやってやったんだい？」と尋ねました。

マンラージは答えました。「親愛なる農夫イラン、言葉はとても大きな力を持っています。あなたが優しく話し掛け、私を励まし続けてくれた時、私が引いていた重みは羽のように軽かったです。優しい言葉は魂の無敵の愛に火を付け、奇跡を引き起こすことができるのです」

その言葉を聞き、イランは朝日の光線のような親しみある温かさが彼の胸に広がるのを感じました。

